

## (2) 研究内容別傾向

### ① BPSD

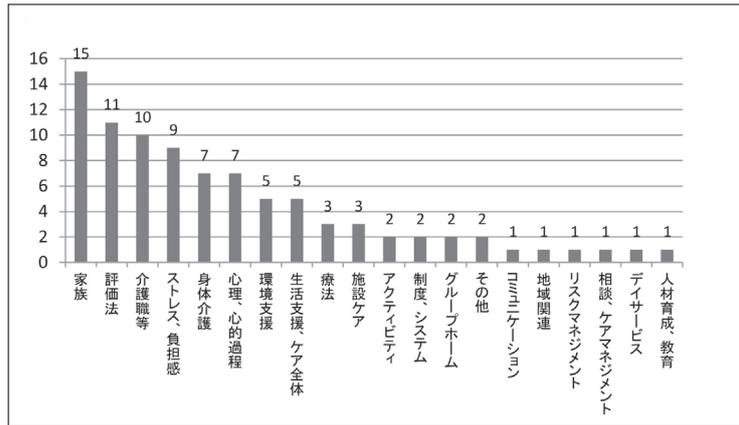
#### ①-1 他の研究内容との重複

BPSD に関する研究64件のうち重複している研究内容は「家族」に関連する研究が15件(23.4%)と最も多く、次いで「評価法」に関連する研究が11件(17.2%)となっている。さらに、「介護職員」に関連する研究が10件(15.6%)、「ストレス、負担感」に関する研究が9件(14.1%)となっている。

表①-1 他の研究内容との重複件数 (N=64)

研究内容分類	件数	重複割合 (%)
家族	15	23.40%
評価法	11	17.20%
介護職等	10	15.60%
ストレス、負担感	9	14.10%
身体介護	7	10.90%
心理、心的過程	7	10.90%
環境支援	5	7.80%
生活支援、ケア全体	5	7.80%
療法	3	4.70%
施設ケア	3	4.70%
アクティビティ	2	3.10%
制度、システム	2	3.10%
グループホーム	2	3.10%
その他	2	3.10%
コミュニケーション	1	1.60%
地域関連	1	1.60%
リスクマネジメント	1	1.60%
相談、ケアマネジメント	1	1.60%
デイサービス	1	1.60%
人材育成、教育	1	1.60%

図①-1 他の研究内容との重複状況 (N=64)



#### ①-2 研究方法の傾向

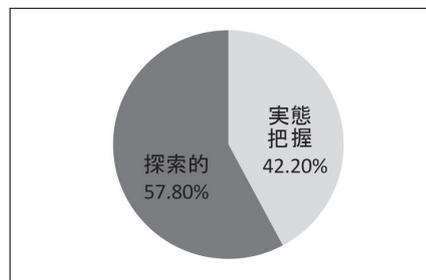
##### ①-2-1 研究タイプ1の傾向

BPSD に関する研究64件における研究タイプ1別の件数及び比率は、「探索的研究」が37件(57.8%)であり、「実態把握研究」が27件(42.2%)であった。BPSD に関する研究タイプとして実態把握研究よりも探索的研究が若干多い傾向がうかがえる。

表①-2-1 研究タイプ1

	件数	割合
実態把握	27	42.20%
探索的	37	57.80%
仮説検証型	0	0.00%
その他	0	0.00%
合計	64	100.00%

図①-2-1 研究タイプ1



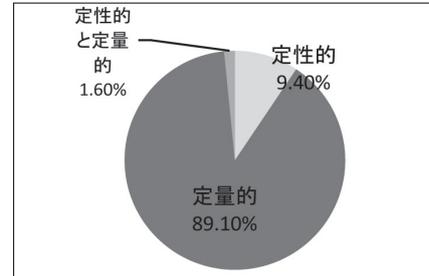
### ①-2-2 研究タイプ2の傾向

BPSDに関する研究64件における研究タイプ2別の件数及び比率は、「定量的研究」が57件(89.1%)と最も高く、全体の9割近くを占めている。次いで「定性的研究」が6件(9.4%)、「定性的研究と定量的研究」の組み合わせが1件(1.6%)となっている。

表①-2-2研究タイプ2

	件数	割合
定性的	6	9.40%
定量的	57	89.10%
定性的と定量的	1	1.60%
合計	64	100.00%

図①-2-2研究タイプ2



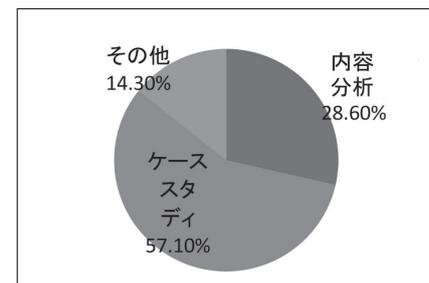
### ①-2-3 定性的研究の種類

定性的研究の種類において、「ケーススタディ」が4件であり57.1%であり、次いで、「内容分析」が2件、28.6%となっている。また、「その他」が1件であり、14.3%となっている。

表①-2-3 定性的研究の種類

	件数	割合
内容分析	2	28.60%
会話分析	0	0.00%
エスノメソドロジー	0	0.00%
グラウンデッドセオリー	0	0.00%
ケーススタディ	4	57.10%
その他	1	14.30%
合計	7	100.00%

図①-2-3 定性的研究の種類



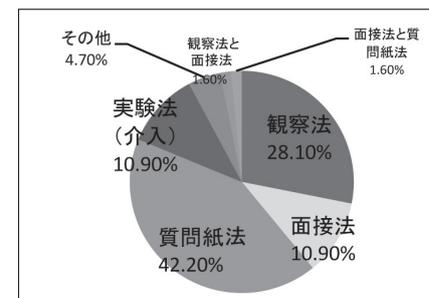
### ①-2-4 研究方法の傾向

研究方法において、最も多いのは「質問紙法」で27件(42.2%)であり、次いで、「観察法」が18件(28.1%)となっている。さらに「面接法」、「実験法(介入)」が7件(10.9%)となっている。

表①-2-4 研究方法

	件数	割合
観察法	18	28.10%
面接法	7	10.90%
質問紙法	27	42.20%
実験法(介入)	7	10.90%
その他	3	4.70%
観察法と面接法	1	1.60%
観察法と質問紙法	0	0.00%
面接法と質問紙法	1	1.60%
面接法とその他の方法	0	0.00%
質問紙法と介入法	0	0.00%
観察法と面接法と質問紙法	0	0.00%
観察法と質問紙法とその他の方法	0	0.00%
合計	64	100.00%

図①-2-4 研究方法



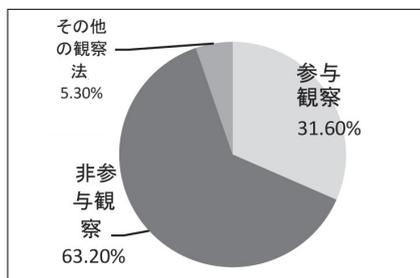
### ①-2-5 観察法の種類

観察法の種類について、「非参与観察」が最も多く12件(63.2%)となっており観察法のうち2/3近くが非参与観察となっている。次いで、「参与観察」が6件(31.6%)、「その他」の観察法が1件(5.3%)と続いている。

表①-2-5 観察法の種類

	件数	割合
参与観察	6	31.60%
非参与観察	12	63.20%
その他	1	5.30%
合計	19	100.00%

図①-2-5 観察法の種類



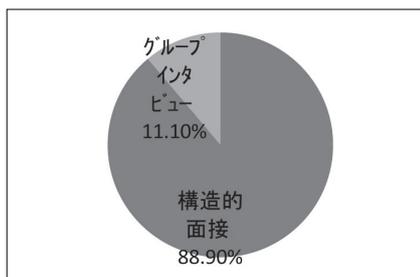
### ①-2-6 面接法の種類

面接法の種類について、「構造的面接」が8件で88.9%であり、「グループインタビュー」が1件で11.1%と続いている。「半構造的面接」は件数が0件だった。

表①-2-6 面接法の種類

	件数	割合
構造的面接	8	88.90%
半構造的面接	0	0.00%
グループインタビュー	1	11.10%
その他	0	0.00%
合計	9	100.00%

図①-2-6 面接法の種類



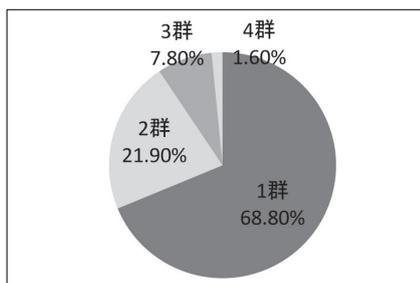
### ①-2-7 対象群数の傾向

対象群数において、最も割合が高かったのは、「1群」であり44件(68.8%)であり、全体の7割近くが「1群」であった。次いで「2群」が高く14件(21.9%)であった。以下、「3群」が5件(7.8%)、「4群」が1件(1.6%)と続く。

表①-2-7 対象群数

	件数	割合
1群	44	68.80%
2群	14	21.90%
3群	5	7.80%
4群	1	1.60%
合計	64	100.00%

図①-2-7 対象群数



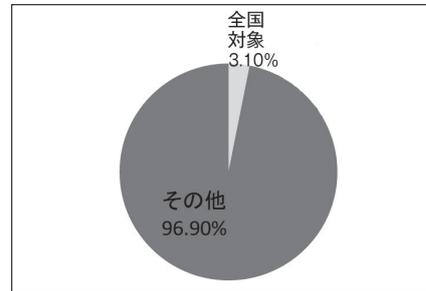
①-2-8 対象範囲の傾向

対象範囲において、「全国対象」であったのは2件(3.1%)に過ぎず、「その他」が62件(96.9%)を占めた。

表①-2-8 対象範囲

	件数	割合
全国対象	2	3.10%
その他	62	96.90%
合計	64	100.00%

図①-2-8 対象範囲



①-2-9 研究方法の基本属性に関する傾向

BPSDの研究において、実施期間の平均は157.0日(33件中)であり。研究地域数の平均は1.96地域(47件中)であった。事業所数の平均は13.16事業所(43件中)であり、対象者人数の平均は355.95人(64件中)であった。

表①-2-9 研究方法の基本属性に関する平均値

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
実施期間(日)	33	2	2520	157.00	435.347
研究地域数	47	1	37	1.96	5.279
事業所数	43	1	157	13.16	29.955
対象者人数(人)	64	1	3888	355.95	742.533

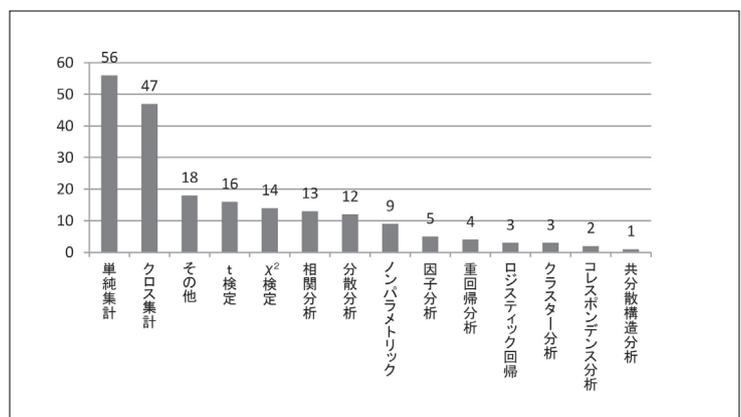
①-2-10 分析方法の件数

分析方法件数は、「単純集計」が最も多く56件であり、全体の87.5%である。次いで「クロス集計」であり47件(73.4%)となっている。さらに「その他」が18件(28.1%)、「t検定」が16件(25.0%)、「 $\chi^2$ 検定」が14件(21.9%)、「相関分析」が13件(20.3%)と続いている。

表①-2-10 分析方法の件数(N=64)

分析方法分類	件数	重複割合(%)
単純集計	56	87.50%
クロス集計	47	73.40%
その他	18	28.10%
t検定	16	25.00%
$\chi^2$ 検定	14	21.90%
相関分析	13	20.30%
分散分析	12	18.80%
ノンパラメトリック	9	14.10%
因子分析	5	7.80%
重回帰分析	4	6.30%
ロジスティック回帰	3	4.70%
クラスター分析	3	4.70%
コレスポンデンス分析	2	3.10%
共分散構造分析	1	1.60%

図①-2-10 分析方法の件数(N=64)



① - 3 対象者属性の傾向

① - 3 - 1 平均年齢

対象者(70件中)の平均年齢は71.559歳であり、標準偏差は16.1153歳である。最大値は92.0歳、最小値は28.4歳となっている。

表① - 3 - 1 平均年齢

	平均値	度数	標準偏差	最小値	最大値
BPSD	71.559	70	16.1153	28.4	92.0

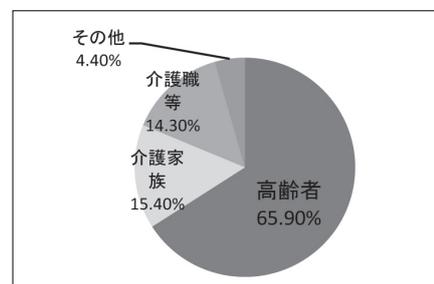
① - 3 - 2 対象者属性の傾向

対象者の属性は「高齢者」が最も多く60件(65.9%)である。次いで、「介護家族」が14件で15.4%、「介護職等」が13件で14.3%と続いている。

表① - 3 - 2 対象者属性

	高齢者	介護家族	介護職等	学生	その他	合計
件数	60	14	13	0	4	91
割合	65.90%	15.40%	14.30%	0.00%	4.40%	100.00%

図① - 3 - 2 対象者属性



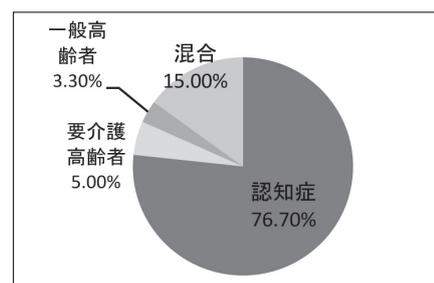
① - 3 - 3 高齢者属性の傾向

対象者属性が高齢者60件の中で、その内訳は「認知症」が46件、76.7%と最も高く、全体の3/4を占めている。次いで「要介護高齢者」が3件で5.0%、「一般高齢者」が2件で3.3%であり、これら「混合」は9件で15.0%にのぼる。

表① - 3 - 3 高齢者属性

	認知症	要介護高齢者	一般高齢者	混合	合計
件数	46	3	2	9	60
割合	76.70%	5.00%	3.30%	15.00%	100.00%

図① - 3 - 3 高齢者属性



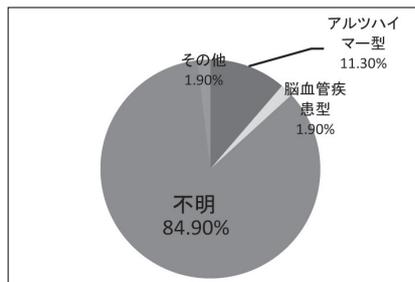
### ①-3-4 認知症種類の傾向

認知症の種類は最も多いのは「不明」であり45件(84.9%)にのぼる。次いで「アルツハイマー型」が6件(11.3%)であり、「脳血管疾患型」、「その他」が1件(1.9%)と続く。

表①-3-4 認知症種類

	アルツハイマー型	脳血管疾患型	レビー小体型	前頭側頭型(ピック)	不明	その他	合計
件数	6	1	0	0	45	1	53
割合	11.30%	1.90%	0.00%	0.00%	84.90%	1.90%	100.00%

図①-3-4 認知症種類



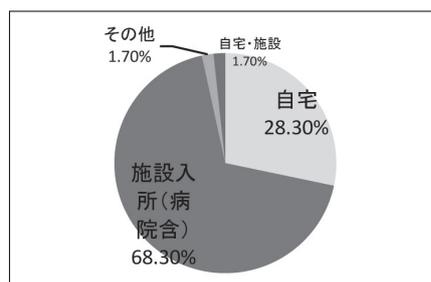
### ①-3-5 所在の傾向

所在については、「施設入所(病院含)」が最も多く41件(68.3%)であり、次いで「自宅」が17件(28.3%)であり、両者で全体の96.6%となっている。「その他」、「自宅・施設」がともに1件であり1.7%となっている。

表①-3-5 所在

	自宅	施設入所(病院含)	その他	自宅・施設	不明	合計
件数	17	41	1	1	0	60
割合	28.30%	68.30%	1.70%	1.70%	0.00%	100.00%

図①-3-5 所在



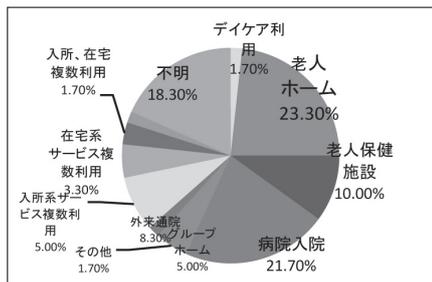
① - 3 - 6 利用サービスの傾向

利用サービスについて最も割合が高いのは「老人ホーム」で14件(23.3%)となっている。次いで、「病院入院」で13件(21.7%)である。以下、「老人保健施設」が6件(10.0%)、「外来通院」が5件(8.3%)と続いている。

表① - 3 - 6 利用サービス

	ヘルパー	デイサービス	デイケア	小規模多機能	老人ホーム	老人保健施設	病院入院	
件数	0	0	1	0	14	6	13	
割合	0.00%	0.00%	1.70%	0.00%	23.30%	10.00%	21.70%	
	グループホーム	その他	外来通院	入所系サービス複数利用	在宅系サービス複数利用	入所・在宅系サービス複数利用	不明	合計
	3	1	5	3	2	1	11	60
	5.00%	1.70%	8.30%	5.00%	3.30%	1.70%	18.30%	100.00%

図① - 3 - 6 利用サービス



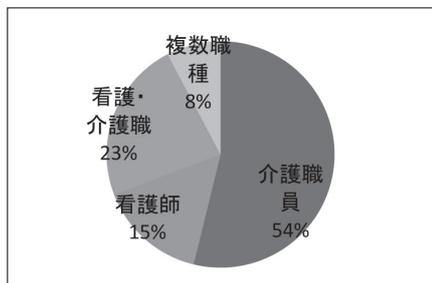
① - 3 - 7 職員種別の傾向

職員種別については「介護職員」が7件(53.8%)と最も高く半数を超えている。次いで「看護・介護職」が3件(23.1%)、「看護師」が2件(15.4%)、「複数職種」が1件(7.7%)となっている。

表① - 3 - 7 職員種別

	介護職員	ケアマネ	看護師	医師	相談員	ホームヘルパー	その他
件数	7	0	2	0	0	0	0
割合	53.80%	0.00%	15.40%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
	看護・介護職	複数職種	合計				
	3	1	13				
	23.10%	7.70%	100.00%				

図① - 3 - 7 職員種別



## ②身体介護

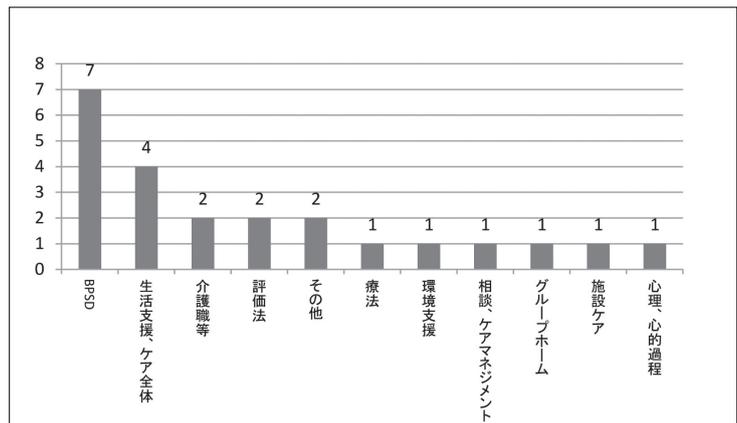
### ②-1 他の研究内容との重複

身体介護に関連する研究41件のうち重複している研究内容は「BPSD」に関連する研究が最も多く7件(17.1%)となっており、次いで「生活支援、ケア全体」に関連する研究が4件(9.8%)となっている。さらに、「介護職等」、「評価法」、「その他」に関連する研究がそれぞれ2件(4.9%)となっている。

表②-1 他の研究内容との重複件数 (N=41)

研究内容分類	件数	重複割合 (%)
BPSD	7	17.10%
生活支援、ケア全体	4	9.80%
介護職等	2	4.90%
評価法	2	4.90%
その他	2	4.90%
療法	1	2.40%
環境支援	1	2.40%
相談、ケアマネジメント	1	2.40%
グループホーム	1	2.40%
施設ケア	1	2.40%
心理、心的過程	1	2.40%

図②-1 他の研究内容との重複状況 (N=41)



### ②-2 研究方法の傾向

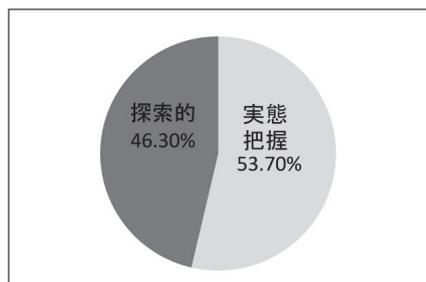
#### ②-2-1 研究タイプ1の傾向

身体介護に関する研究41件における研究タイプ1別の件数及び比率は、「実態把握研究」タイプが22件(53.7%)であり、「探索的研究」が19件(46.3%)であった。身体介護に関する研究タイプとして実態把握研究のほうが探索的研究よりも若干多い傾向がうかがえる。

表②-2-1 研究タイプ1

	件数	割合
実態把握	22	53.70%
探索的	19	46.30%
仮説検証型	0	0.00%
その他	0	0.00%
合計	41	100.00%

図②-2-1 研究タイプ1



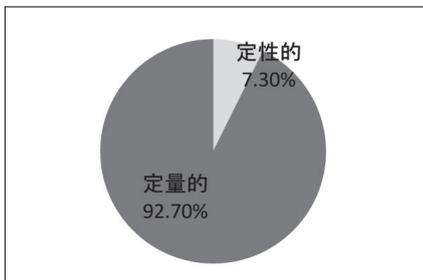
### ②-2-2 研究タイプ2の傾向

身体介護に関する研究41件における研究タイプ2別の件数及び比率は、「定量的研究」が38件(92.7%)ととても高く、全体の9割近くを占めている。次いで「定性的研究」が3件(7.3%)、「定性的研究と定量的研究」の組み合わせはなかった。

表②-2-2 研究タイプ2

	件数	割合
定性的	3	7.30%
定量的	38	92.70%
定性的と定量的	0	0.00%
合計	41	100.00%

図②-2-2 研究タイプ2



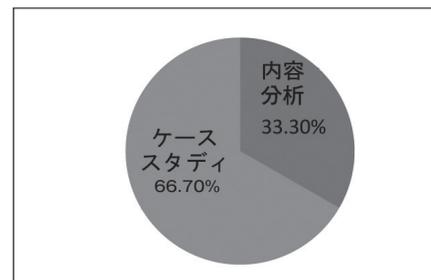
### ②-2-3 定性的研究の種類

定性的研究の種類において、「ケーススタディ」が2件、66.7%であり、次いで、「内容分析」が1件で33.3%となっている。

表②-2-3 定性的研究の種類

	件数	割合
内容分析	1	33.30%
会話分析	0	0.00%
エスノメソドロジー	0	0.00%
グラウンデッドセオリー	0	0.00%
ケーススタディ	2	66.70%
その他	0	0.00%
合計	3	100.00%

図②-2-3 定性的研究の種類



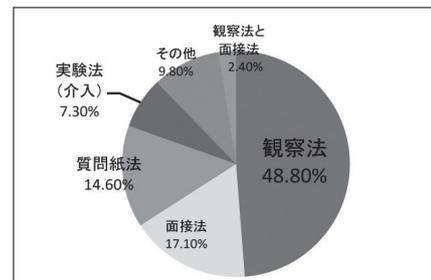
### ②-2-4 研究方法の傾向

研究方法において、最も多いのは「観察法」で20件(48.8%)であり、次いで、「面接法」が7件(17.1%)となっている。さらに「質問紙法」が6件(14.6%)、「その他」が4件(9.8%)、「実験法(介入)」が3件(7.3%)となっている。

表②-2-4 研究方法

	件数	割合
観察法	20	48.80%
面接法	7	17.10%
質問紙法	6	14.60%
実験法(介入)	3	7.30%
その他	4	9.80%
観察法と面接法	1	2.40%
観察法と質問紙法	0	0.00%
面接法と質問紙法	0	0.00%
面接法とその他の方法	0	0.00%
質問紙法と介入法	0	0.00%
観察法と面接法と質問紙法	0	0.00%
観察法と質問紙法とその他の方法	0	0.00%
合計	41	100.00%

図②-2-4 研究方法



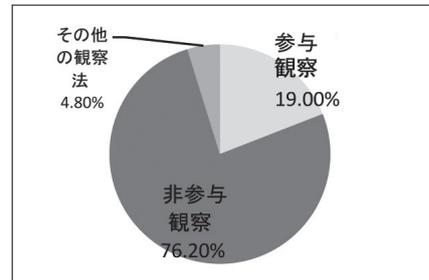
### ②-2-5 観察法の種類

観察法の種類について、「非参与観察」が最も多く16件(76.2%)となっており観察法のうち3/4が非参与観察となっている。次いで、参与観察が4件(19.0%)、その他の観察法が1件(4.8%)と続いている。

表②-2-5 観察法の種類

	件数	割合
参与観察	4	19.00%
非参与観察	16	76.20%
その他	1	4.80%
合計	21	100.00%

図②-2-5 観察法の種類



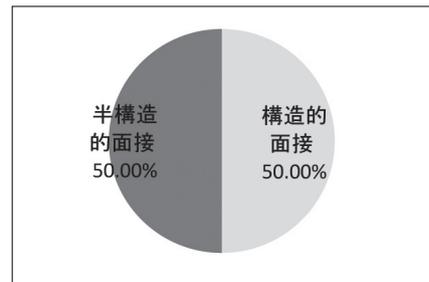
### ②-2-6 面接法の種類

研究方法が面接法であった8件のうち、面接法の種類については「構造的面接」と「半構造的面接」がともに4件で50.0%であった。「グループインタビュー」はなかった。

表②-2-6 面接法の種類

	件数	割合
構造的面接	4	50.00%
半構造的面接	4	50.00%
グループインタビュー	0	0.00%
その他	0	0.00%
合計	8	100.00%

図②-2-6 面接法の種類



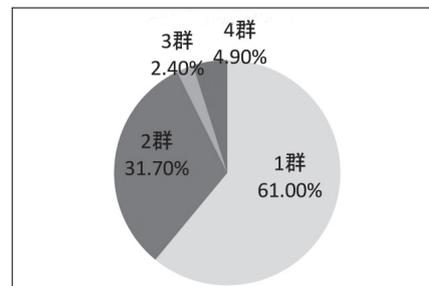
### ②-2-7 対象群数の傾向

対象群数において、最も割合が高かったのは、「1群」で25件(61.0%)であり、全体の6割近くが「1群」であった。次いで「2群」が高く、13件(31.7%)であった。以下、「4群」が2件(4.9%)、「3群」が1件(2.4%)と続く。

表②-2-7 対象群数

	件数	割合
1群	25	61.00%
2群	13	31.70%
3群	1	2.40%
4群	2	4.90%
合計	41	100.00%

図②-2-7 対象群数



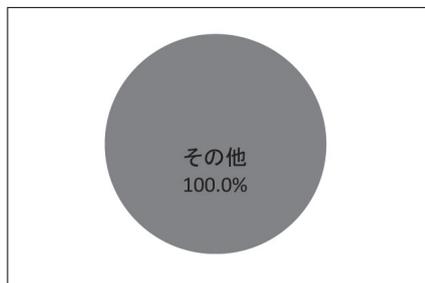
②-2-8 対象範囲の傾向

対象範囲において、全てが「その他」であり41件(100%)、「全国対象」はなかった。

表②-2-8 対象範囲

	件数	割合
全国対象	0	0.00%
その他	41	100.00%
合計	41	100.00%

図②-2-8 対象範囲



②-2-9 研究方法の基本属性に関する傾向

身体介護の研究において、実施期間の平均は25件中279.52日であり、研究地域数の平均は38件中1.11地域であった。事業所数の平均は34件中4.26事業所であり、対象者人数の平均は41件中130.12人であった。

表②-2-9 研究方法の基本属性に関する平均値

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
実施期間(日)	25	1	2550	279.52	575.506
研究地域数	38	1	3	1.11	0.388
事業所数	34	1	95	4.26	16.099
対象者人数(人)	41	1	1717	130.12	275.778

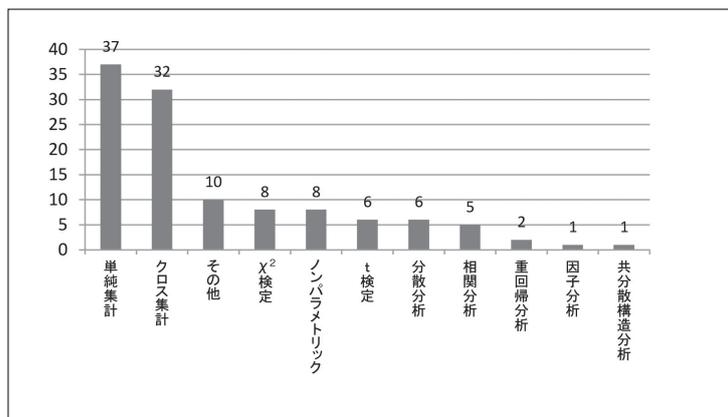
②-2-10 分析方法の件数

分析方法の件数は、「単純集計」が最も多く37件であり、全体の90.2%である。次いで「クロス集計」であり32件(78.0%)、「その他」10件(24.4%)となっている。さらに「 $\chi^2$ 検定」、「ノンパラメトリック」がともに8件(19.5%)、「t検定」、「分散分析」がともに6件(14.6%)と続いている。

表②-2-10 分析方法の件数(N=41)

分析方法分類	件数	重複割合(%)
単純集計	37	90.20%
クロス集計	32	78.00%
その他	10	24.40%
$\chi^2$ 検定	8	19.50%
ノンパラメトリック	8	19.50%
t検定	6	14.60%
分散分析	6	14.60%
相関分析	5	12.20%
重回帰分析	2	4.90%
因子分析	1	2.40%
共分散構造分析	1	2.40%

図②-2-10 分析方法の件数(N=41)



② - 3 対象者属性の傾向

② - 3 - 1 平均年齢

47件中の対象者の平均年齢は78.300歳であり、標準偏差は10.8682歳である。最大値は93.0歳、最小値は37.4歳となっている。

表② - 3 - 1 平均年齢

	平均値	度数	標準偏差	最小値	最大値
身体介護	78.300	47	10.8682	37.4	93.0

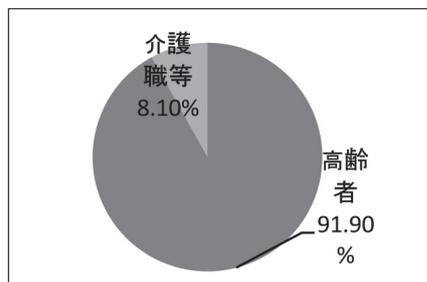
② - 3 - 2 対象者属性の傾向

身体介護について、対象者の属性が「高齢者」が最も多く57件(91.9%)となっており、9割を超えている。次いで、「介護職等」が5件で8.1%であり、「介護家族」等はなかった。

表② - 3 - 2 対象者属性

	高齢者	介護家族	介護職等	学生	その他	合計
件数	57	0	5	0	0	62
割合	91.90%	0.00%	8.10%	0.00%	0.00%	100.00%

図② - 3 - 2 対象者属性



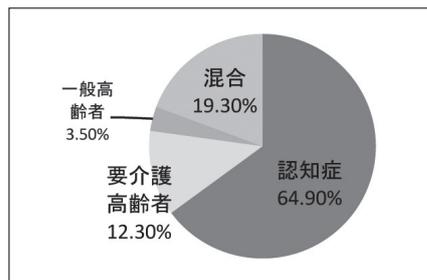
② - 3 - 3 高齢者属性の傾向

対象者属性が高齢者57件の中で、その内訳は「認知症」が37件で64.9%と最も高く、次いで「要介護高齢者」が7件で12.3%、「一般高齢者」が2件で3.5%であり、これら混合は11件で19.3%にのぼる。

表② - 3 - 3 高齢者属性

	認知症	要介護高齢者	一般高齢者	混合	合計
件数	37	7	2	11	57
割合	64.90%	12.30%	3.50%	19.30%	100.00%

図② - 3 - 3 高齢者属性



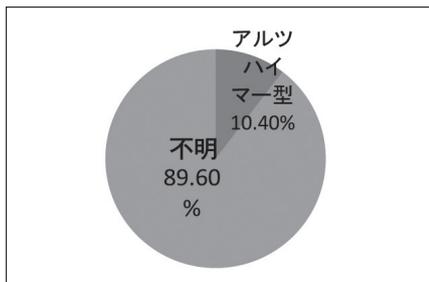
②-3-4 認知症種類の傾向

認知症の種類は最も多いのは「不明」であり43件(89.6%)となっており9割に近い。次いで「アルツハイマー型」が5件(10.4%)であり、「脳血管疾患型」等はなかった。

表②-3-4 認知症種類

	アルツハイマー型	脳血管疾患型	レビー小体型	前頭側頭型 (ピック)	不明	その他	合計
件数	5	0	0	0	43	0	48
割合	10.40%	0.00%	0.00%	0.00%	89.60%	0.00%	100.00%

図②-3-4 認知症種類



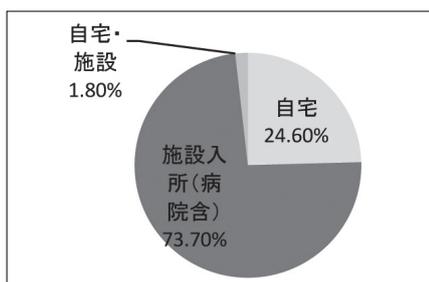
②-3-5 所在の傾向

所在については、「施設入所(病院含)」が最も多く42件(73.7%)であり、次いで「自宅」が14件(24.6%)であり、両者で全体の98.3%となっている。「自宅・施設」は1件であり1.8%となっている。

表②-3-5 所在

	自宅	施設入所 (病院含)	その他	自宅・施設	合計
件数	14	42	0	1	57
割合	24.60%	73.70%	0.00%	1.80%	100.00%

図②-3-5 所在



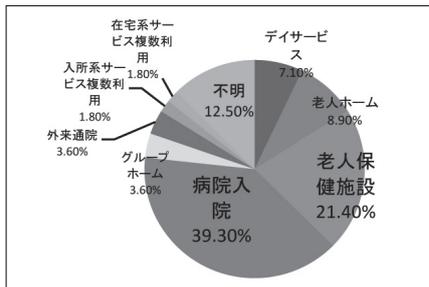
### ②-3-6 利用サービスの傾向

利用サービスについて最も割合が高いのは「病院入院」で22件(39.3%)となっている。次いで、「老人保健施設」で12件(21.4%)である。以下、「老人ホーム」が5件(8.9%)、「デイサービス」が4件(7.1%)と続いている。

表②-3-6 利用サービス

	ヘルパー	デイサービス	デイケア	小規模多機能	老人ホーム	老人保健施設	病院入院	
件数	0	4	0	0	5	12	22	
割合	0.00%	7.10%	0.00%	0.00%	8.90%	21.40%	39.30%	
	グループホーム	その他	外来通院	入所系サービス複数利用	在宅系サービス複数利用	入所・在宅系サービス複数利用	不明	合計
	2	0	2	1	1	0	7	56
	3.60%	0.00%	3.60%	1.80%	1.80%	0.00%	12.50%	100.00%

図②-3-6 利用サービス



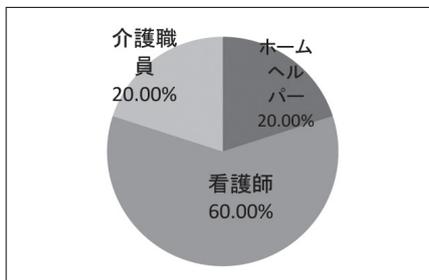
### ②-3-7 職員種別の傾向

職員種別については「看護師」が3件(60.0%)と全体の6割にのぼっている。次いで「介護職員」、  
「ホームヘルパー」がともに1件(20.0%)、そのほかの職員種別はなかった。

表②-3-7 職員種別

	介護職員	ケアマネ	看護師	医師	相談員	ホームヘルパー	その他
件数	1	0	3	0	0	1	0
割合	20.00%	0.00%	60.00%	0.00%	0.00%	20.00%	0.00%
	介護・看護職	複数職種	合計				
	0	0	5				
	0.00%	0.00%	100.00%				

図②-3-7 職員種別



### ③ コミュニケーション

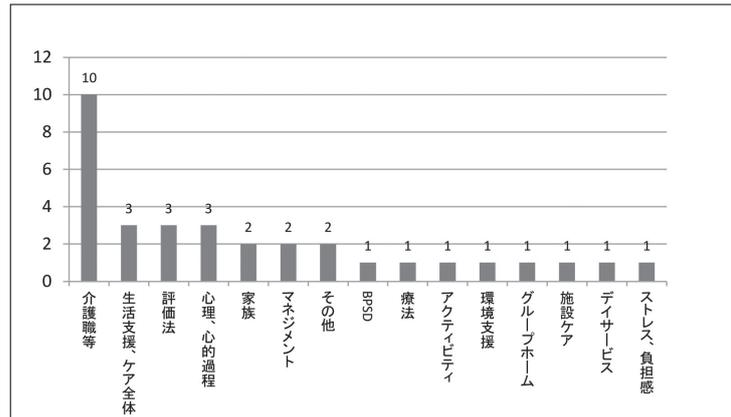
#### ③-1 他の研究内容との重複

コミュニケーションに関連する研究28件のうち重複している研究内容で「介護職等」に関連する研究が最も多く10件(35.7%)となっており、次いで「生活支援、ケア全体」、「評価法」、「心理、心的過程」に関連する研究が3件(10.7%)となっている。さらに、「家族」、「マネジメント」、「その他」に関連する研究がそれぞれ2件(7.1%)となっている。

表③-1 他の研究内容との重複件数 (N=28)

研究内容分類	件数	重複割合 (%)
介護職等	10	35.70%
生活支援、ケア全体	3	10.70%
評価法	3	10.70%
心理、心的過程	3	10.70%
家族	2	7.10%
マネジメント	2	7.10%
その他	2	7.10%
BPSD	1	3.60%
療法	1	3.60%
アクティビティ	1	3.60%
環境支援	1	3.60%
グループホーム	1	3.60%
施設ケア	1	3.60%
デイサービス	1	3.60%
ストレス、負担感	1	3.60%

図③-1 他の研究内容との重複状況 (N=28)



#### ③-2 研究方法の傾向

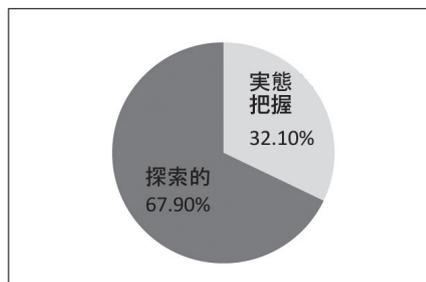
##### ③-2-1 研究タイプ1の傾向

コミュニケーションに関する研究28件における研究タイプ1別の件数及び比率は、「探索的研究」が19件(67.9%)であり、「実態把握研究」が9件(32.1%)であった。コミュニケーションに関する研究タイプとして探索的研究が多数であることがうかがえる。

表③-2-1 研究タイプ1

	件数	割合
実態把握	9	32.10%
探索的	19	67.90%
仮説検証型	0	0.00%
その他	0	0.00%
合計	28	100.00%

図③-2-1 研究タイプ1



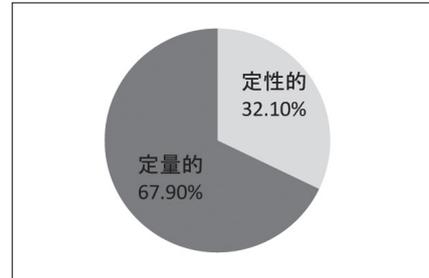
### ③-2-2 研究タイプ2の傾向

コミュニケーションに関する研究28件における研究タイプ2別の件数及び比率は、「定量的研究」が19件(67.9%)と高く、全体の2/3を超えている。次いで「定性的研究」が9件(32.1%)、「定性的研究と定量的研究」はなかった。

表③-2-2 研究タイプ2

	件数	割合
定性的	9	32.10%
定量的	19	67.90%
定性的と定量的	0	0.00%
合計	28	100.00%

図③-2-2 研究タイプ2



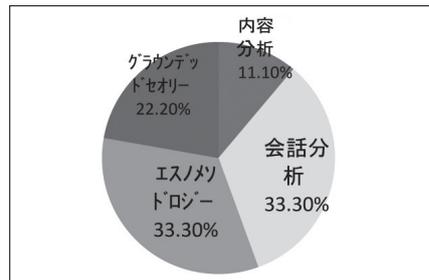
### ③-2-3 定性的研究の種類

定性的研究の種類において、「会話分析」、「エスノメソドロジー」がともに3件、33.3%であり、両方で全体の2/3である。次いで、「グラウンデッドセオリー」が2件で22.2%となっている。「内容分析」は1件で11.1%であった。

表③-2-3 定性的研究の種類

	件数	割合
内容分析	1	11.10%
会話分析	3	33.30%
エスノメソドロジー	3	33.30%
グラウンデッドセオリー	2	22.20%
ケーススタディ	0	0.00%
その他	0	0.00%
合計	9	100.00%

図③-2-3 定性的研究の種類



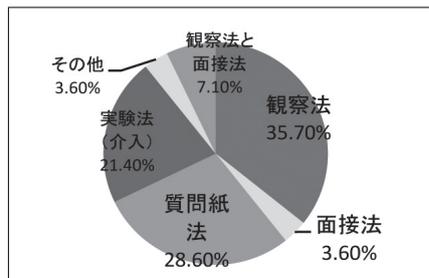
### ③-2-4 研究方法の傾向

研究方法において、最も多いのは「観察法」で10件(35.7%)であり、次いで、「質問紙法」が8件(28.6%)となっている。さらに「実験法(介入)」が6件(21.4%)、「観察法と面接法」が2件(7.1%)となっている。

表③-2-4 研究方法

	件数	割合
観察法	10	35.70%
面接法	1	3.60%
質問紙法	8	28.60%
実験法(介入)	6	21.40%
その他	1	3.60%
観察法と面接法	2	7.10%
観察法と質問紙法	0	0.00%
面接法と質問紙法	0	0.00%
面接法とその他の方法	0	0.00%
質問紙法と介入法	0	0.00%
観察法と面接法と質問紙法	0	0.00%
観察法と質問紙法とその他の方法	0	0.00%
合計	28	100.00%

図③-2-4 研究方法



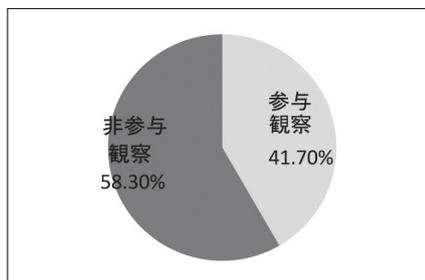
### ③-2-5 観察法の種類

観察法の種類について、「非参与観察」が最も多く7件(58.3%)となっている。次いで、「参与観察」が5件(41.7%)となっており、他の方法はなかった。

表③-2-5 観察法の種類

	件数	割合
参与観察	5	41.70%
非参与観察	7	58.30%
その他	0	0.00%
合計	12	100.00%

図③-2-5 観察法の種類



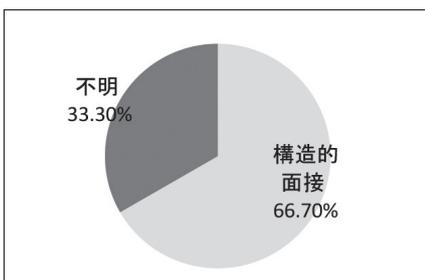
### ③-2-6 面接法の種類

研究方法が面接法であった3件のうち、面接法の種類については「構造的面接」が2件で66.7%であり全体の2/3が「構造的面接」であった。次いで「半構造的面接」が1件(33.3%)であり、「グループインタビュー」等はなかった。

表③-2-6 面接法の種類

	件数	割合
構造的面接	2	66.70%
半構造的面接	1	33.30%
グループインタビュー	0	0.00%
その他	0	0.00%
不明	0	0.00%
合計	3	100.00%

図③-2-6 面接法の種類



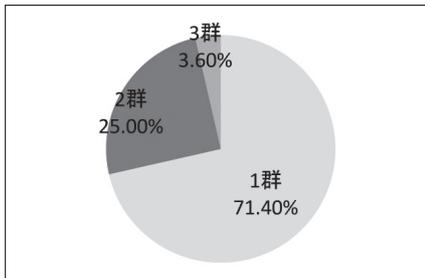
### ③-2-7 対象群数の傾向

対象群数において、最も割合が高かったのは、「1群」が20件(71.4%)であり、全体の7割が「1群」であった。次いで「2群」が高く、7件(25.0%)であった。「3群」は1件(3.6%)で「4群」はなかった。

表③-2-7 対象群数

	件数	割合
1群	20	71.40%
2群	7	25.00%
3群	1	3.60%
4群	0	0.00%
合計	28	100.00%

図③-2-7 対象群数



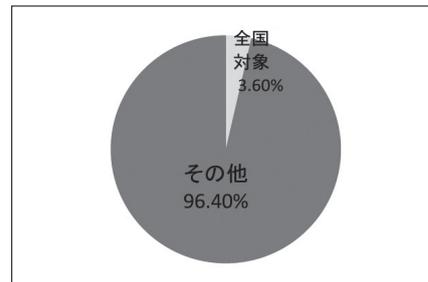
### ③-2-8 対象範囲の傾向

対象範囲において、「全国対象」は1件のみで3.6%であり「その他」は27件で96.4%とほとんどが「その他」であった。

表③-2-8 対象範囲

	件数	割合
全国対象	1	3.60%
その他	27	96.40%
合計	28	100.00%

図③-2-8 対象範囲



### ③-2-9 研究方法の基本属性に関する傾向

コミュニケーションの研究において、実施期間の平均は16件中65.19日である。研究地域数の平均は22件中1.27地域であった。事業所数の平均は23件中5.57事業所であり、対象者人数の平均は28件中105.39人であった。

表③-2-9 研究方法の基本属性に関する平均値

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
実施期間 (日)	16	6	240	65.19	59.616
研究地域数	22	1	4	1.27	0.767
事業所数	23	1	65	5.57	13.648
対象者人数 (人)	28	1	408	105.39	124.577

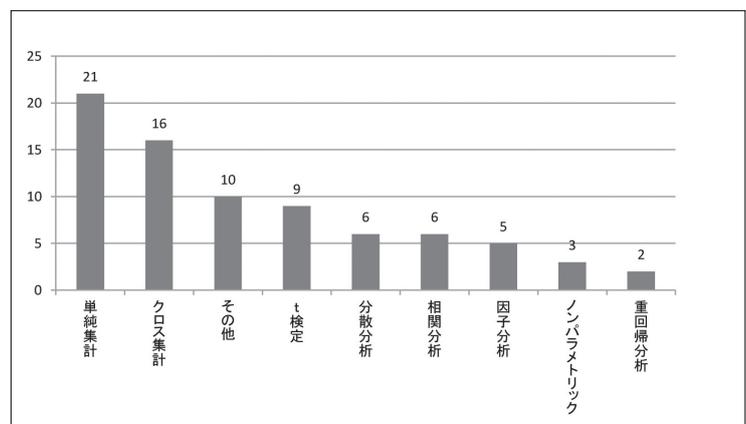
### ③-2-10 分析方法の件数

分析方法の件数は、「単純集計」が最も多く21件であり、全体の75.0%である。次いで「クロス集計」16件、57.1%、「その他」10件、35.7%となっている。さらに「t検定」が9件で、32.1%、「分散分析」、「相関分析」がともに6件で21.4%と続いている。

表③-2-10 分析方法の件数 (N=28)

分析方法分類	件数	重複割合 (%)
単純集計	21	75.00%
クロス集計	16	57.10%
その他	10	35.70%
t検定	9	32.10%
分散分析	6	21.40%
相関分析	6	21.40%
因子分析	5	17.90%
ノンパラメトリック	3	10.70%
重回帰分析	2	7.10%

図③-2-10 分析方法の件数 (N=28)



### ③ - 3 対象者属性の傾向

#### ③ - 3 - 1 平均年齢

28件中の対象者の平均年齢は65.863歳であり、標準偏差は23.2323歳である。最大値は88.3歳、最小値は24.0歳となっている。

表③ - 3 - 1 平均年齢

	平均値	度数	標準偏差	最小値	最大値
コミュニケーション	65.863	28	23.2323	24.0	88.3

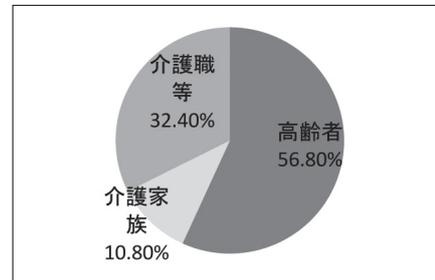
#### ③ - 3 - 2 対象者属性の傾向

コミュニケーションの対象者属性について、対象者の属性が「高齢者」が最も多く21件(56.8%)となっている。次いで、「介護職等」が12件で32.4%であり、「介護家族」は4件、10.8%であった。

表③ - 3 - 2 対象者属性

	高齢者	介護家族	介護職等	学生	その他	合計
件数	21	4	12	0	0	37
割合	56.80%	10.80%	32.40%	0.00%	0.00%	100.00%

図③ - 3 - 2 対象者属性



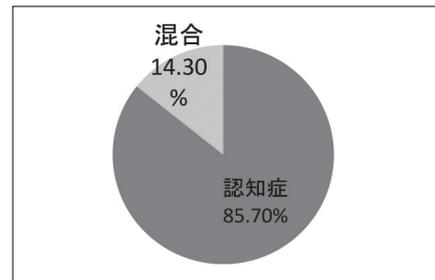
#### ③ - 3 - 3 高齢者属性の傾向

対象者属性が高齢者21件の中で、その内訳は「認知症」が18件で85.7%と高く、8割を超えている。次いで「混合」が3件で14.3%となっている。「要介護高齢者」、「一般高齢者」はなかった。

表③ - 3 - 3 高齢者属性

	認知症	要介護高齢者	一般高齢者	混合	合計
件数	18	0	0	3	21
割合	85.70%	0.00%	0.00%	14.30%	100.00%

図③ - 3 - 3 高齢者属性



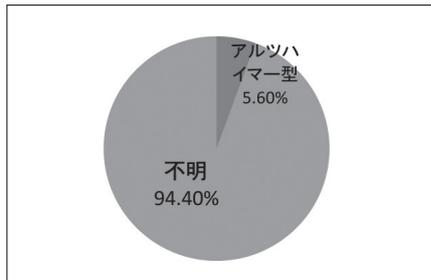
### ③-3-4 認知症種類の傾向

認知症の種類で最も高いのは「不明」であり17件(94.4%)となっており9割を超えている。「アルツハイマー型」が1件(5.6%)であった。「脳血管疾患型」等はなかった。

表③-3-4 認知症種類

	アルツハイマー型	脳血管疾患型	レビー小体型	前頭側頭型 (ピック)	不明	その他	合計
件数	1	0	0	0	17	0	18
割合	5.60%	0.00%	0.00%	0.00%	94.40%	0.00%	100.00%

図③-3-4 認知症種類



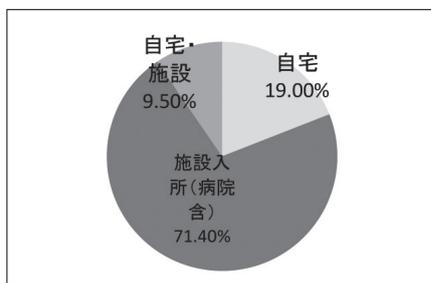
### ③-3-5 所在の傾向

所在については、「施設入所(病院含)」が最も多く15件(71.4%)であり、次いで「自宅」が4件(19.0%)であり、両者で全体の9割にのぼっている。「自宅・施設」は2件であり9.5%となっている。

表③-3-5 所在

	自宅	施設入所 (病院含)	その他	自宅・施設	不明	合計
件数	4	15	0	2	0	21
割合	19.00%	71.40%	0.00%	9.50%	0.00%	100.00%

図③-3-5 所在



### ③-3-6 利用サービスの傾向

利用サービスについて最も割合が高いのは「老人ホーム」で7件(33.3%)となっている。次いで、「老人保健施設」で3件(14.3%)である。以下、「病院入院」が2件(9.5%)、「デイケア」、「外来通院」、「在宅サービス複数利用」、「入所・在宅系サービス複数利用」がともに1件(4.8%)と続いている。

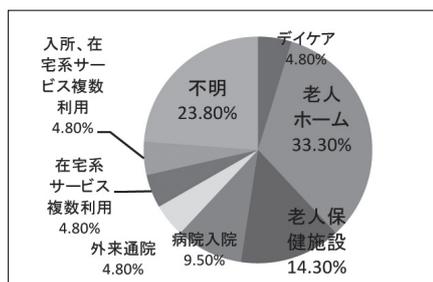
表③-3-6 利用サービス

	ヘルパー	デイサービス	デイケア	小規模多機能	老人ホーム	老人保健施設	病院入院
件数	0	0	1	0	7	3	2
割合	0.00%	0.00%	4.80%	0.00%	33.30%	14.30%	9.50%

	グループホーム	その他	外来通院	入所サービス複数利用	在宅サービス複数利用	入所・在宅サービス複数利用	不明	合計
件数	0	0	1	0	1	1	5	21
割合	0.00%	0.00%	4.80%	0.00%	4.80%	4.80%	23.80%	100.00%

図③-3-6 利用サービス



### ③-3-7 職員種別の傾向

職員種別については「介護職員」が7件(58.3%)と全体の6割近くにのぼっている。次いで「看護師」が3件、25.0%、「複数職種」が2件(16.7%)であり、そのほかの職員種別はなかった。

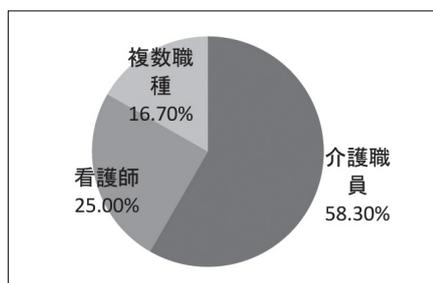
表③-3-7 職員種別

	介護職員	ケアマネ	看護師	医師	相談員	ホームヘルパー	その他
件数	7	0	3	0	0	0	0
割合	58.30%	0.00%	25.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%

	看護・介護職	複数職種	合計
件数	0	2	12
割合	0.00%	16.70%	100.00%

図③-3-7 職員種別



#### ④ターミナルケア

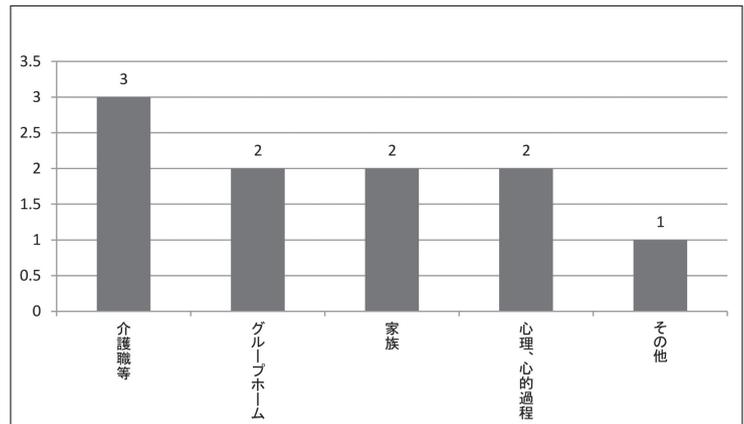
##### ④-1 他の研究内容との重複

ターミナルケアに関連する研究7件のうち重複している研究内容で「介護職等」に関連する研究が最も多く3件(42.9%)となっており、次いで「グループホーム」、「家族」、「心理、心的過程」に関連する研究がそれぞれ2件(28.6%)となっている。さらに、「その他」が1件(14.3%)となっている。

表④-1 他の研究内容との重複件数 (N=7)

研究内容分類	件数	重複割合 (%)
介護職等	3	42.90%
グループホーム	2	28.60%
家族	2	28.60%
心理、心的過程	2	28.60%
その他	1	14.30%

図④-1 他の研究内容との重複件数 (N=7)



##### ④-2 研究方法の傾向

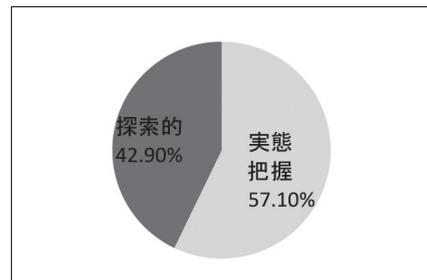
###### ④-2-1 研究タイプ1の傾向

ターミナルケアに関する研究7件における研究タイプ1別の件数及び比率は、「実態把握研究」が4件(57.1%)であり、「探索的研究」が3件(42.9%)であった。ターミナルケアに関する研究タイプとしてあまり変わらないことがうかがえる。

表④-2-1 研究タイプ1

	件数	割合
実態把握	4	57.10%
探索的	3	42.90%
仮説検証型	0	0.00%
その他	0	0.00%
合計	7	100.00%

図④-1 研究タイプ1



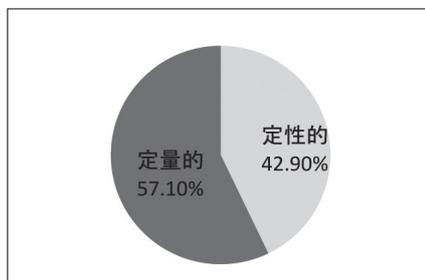
#### ④-2-2 研究タイプ2の傾向

ターミナルケアに関する研究7件における研究タイプ2別の件数及び比率は、「定量的研究」が4件(57.1%)であり、次いで「定性的研究」が3件(42.9%)となっており、「定性的研究と定量的研究」はなかった。

表④-2-2 研究タイプ2

	件数	割合
定性的	3	42.90%
定量的	4	57.10%
定性的と定量的	0	0.00%
合計	7	100.00%

図④-2-2 研究タイプ2



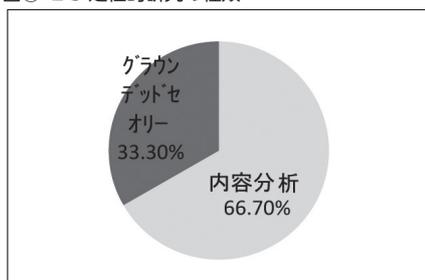
#### ④-2-3 定性的研究の種類

定性的研究の種類において、「内容分析」が2件で66.7%であった。次いで、「グラウンデッドセオリー」が1件で33.3%となっている。他の定性的研究種類はなかった。

表④-2-3 定性的研究の種類

	件数	割合
内容分析	2	66.70%
会話分析	0	0.00%
エスノメソドロジー	0	0.00%
グラウンデッドセオリー	1	33.30%
ケーススタディ	0	0.00%
合計	3	100.00%

図④-2-3 定性的研究の種類



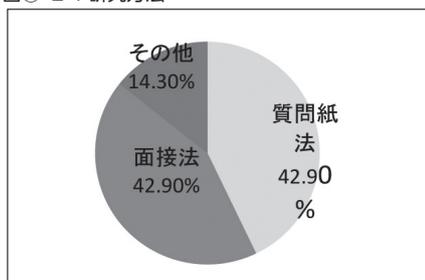
#### ④-2-4 研究方法の傾向

研究方法において、「面接法」、「質問紙法」がともに3件で42.9%であり、「その他」が1件(14.3%)であった。

表④-2-4 研究方法

	件数	割合
観察法	0	0.00%
面接法	3	42.90%
質問紙法	3	42.90%
実験法(介入)	0	0.00%
その他	1	14.30%
観察法と面接法	0	0.00%
観察法と質問紙法	0	0.00%
面接法と質問紙法	0	0.00%
面接法とその他の方法	0	0.00%
質問紙法と介入法	0	0.00%
観察法と面接法と質問紙法	0	0.00%
観察法と質問紙法とその他の方法	0	0.00%
合計	7	100.00%

図④-2-4 研究方法



#### ④-2-5 観察法の種類

観察法の種類について、観察法を用いた研究がなかったため、種類の結果は得られなかった。

#### ④-2-6 面接法の種類

研究方法が面接法であった3件のうち、面接法の種類については「半構造的面接」が3件全てであった。「構造的面接」、「グループインタビュー」はなかった。

表④-2-6 面接法の種類

	件数	割合
構造的面接	0	0.00%
半構造的面接	3	100.00%
グループインタビュー	0	0.00%
その他	0	0.00%
合計	3	100.00%

図④-2-6 面接法の種類



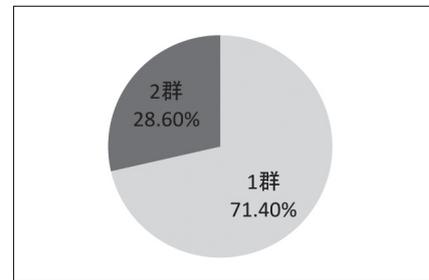
#### ④-2-7 対象群数の傾向

対象群数において、最も割合が高かったのは、「1群」であり5件(71.4%)であり、全体の7割が「1群」であった。次いで「2群」が高く、2件(28.6%)であった。その他の群数はなかった。

表④-2-7 対象群数

	件数	割合
1群	5	71.40%
2群	2	28.60%
3群	0	0.00%
4群	0	0.00%
合計	7	100.00%

図④-2-7 対象群数



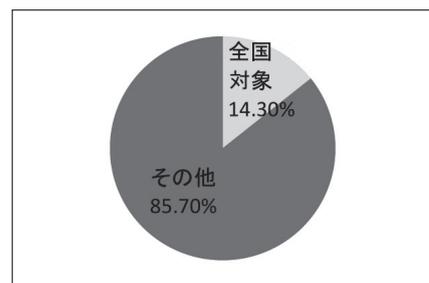
#### ④-2-8 対象範囲の傾向

対象範囲において、「全国対象」は1件のみで14.3%であり、「その他」は6件85.7%であり、ほとんどが「その他」であった。

表④-2-8 対象範囲

	件数	割合
全国対象	1	14.30%
その他	6	85.70%
合計	7	100.00%

図④-2-8 対象範囲



#### ④-2-9 研究方法の基本属性に関する傾向

ターミナルケアの研究において、実施期間の平均は5件中76.20日であり、研究地域数の平均は5件中1.60地域であった。事業所数の平均は5件中716.00事業所であり、対象者人数の平均は7件中557.71人であった。

表④-2-9 研究方法の基本属性に関する平均値

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
実施期間(日)	5	21	150	76.20	47.981
研究地域数	5	1	4	1.60	1.342
事業所数	5	4	3557	716.00	1588.168
対象者人数(人)	7	5	3557	557.71	1325.138

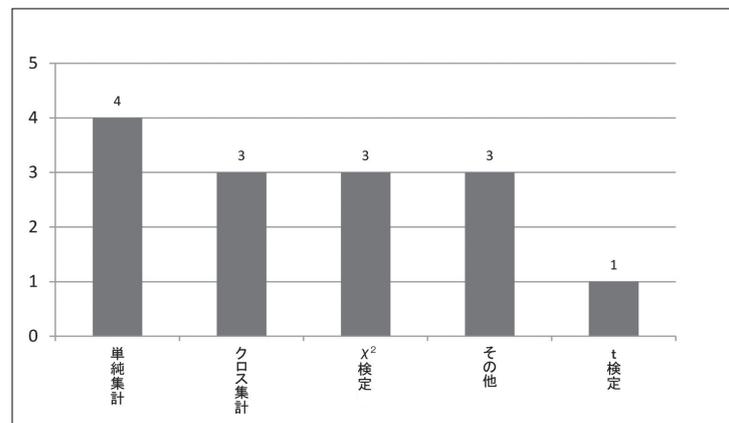
#### ④-2-10 分析方法の件数

分析方法の件数は、「単純集計」が最も多く4件であり、57.1%である。次いで「クロス集計」、「 $\chi^2$ 検定」、「その他」でありそれぞれ3件、42.9%となっている。さらに「t検定」が1件、14.3%となっている。

表④-2-10 分析方法の件数(N=7)

分析方法分類	件数	重複割合(%)
単純集計	4	57.10%
クロス集計	3	42.90%
$\chi^2$ 検定	3	42.90%
その他	3	42.90%
t検定	1	14.30%

図④-2-10 分析方法の件数(N=7)



#### ④-3 対象者属性の傾向

##### ④-3-1 平均年齢

対象者の平均年齢は75.033歳であり、標準偏差は12.3087歳である。最大値は87.6歳、最小値は63.0歳となっている。

表④-3-1 平均年齢

	平均値	度数	標準偏差	最小値	最大値
ターミナルケア	75.033	3	12.3087	63.0	87.6

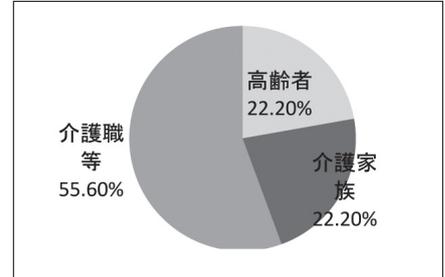
#### ④-3-2 対象者属性の傾向

ターミナルケアについて、対象者の属性が「介護職等」が最も多く 5 件(55.6%)となっている。次いで、「高齢者」、「介護家族」がともに 2 件で22.2%であった。

表④-3-2 対象者属性

	高齢者	介護家族	介護職等	学生	その他	合計
件数	2	2	5	0	0	9
割合	22.20%	22.20%	55.60%	0.00%	0.00%	100.00%

図④-3-2 対象者属性



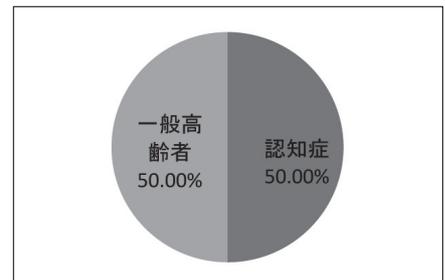
#### ④-3-3 高齢者属性の傾向

対象者属性が高齢者 2 件の中で、その内訳は「認知症」、「一般高齢者」がともに 1 件で、それぞれ 50.0%であった。「混合」、「要介護高齢者」はなかった。

表④-3-3 高齢者属性

	認知症	要介護高齢者	一般高齢者	混合	合計
件数	1	0	1	0	2
割合	50.00%	0.00%	50.00%	0.00%	100.00%

図④-3-3 高齢者属性



#### ④-3-4 認知症種類の傾向

認知症の種類が記載されていたものは 1 件で、「不明」のみであった。その他の種類はなかった。

表④-3-4 認知症種類

	アルツハイマー型	脳血管疾患型	レビー小体型	前頭側頭型 (ピック)	不明	その他	合計
件数	0	0	0	0	1	0	1
割合	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%	0.00%	100.00%

図④-3-4 認知症種類



#### ④-3-5 所在の傾向

所在については、2件のみが記載されており、そのいずれも「自宅」であった。そのほかの記載はなかった。

表④-3-5 所在

	自宅	施設入所 (病院含)	その他	自宅・施設	不明	合計
件数	2	0	0	0	0	2
割合	100.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%

図④-3-5 所在



#### ④-3-6 利用サービスの傾向

ターミナルケアにおける利用サービスについての傾向は、不明が2件のみで、その他の利用サービスの記載はなかった。

表④-3-6 利用サービス

	ヘルパー	デイサービス	デイケア	小規模多機能	老人ホーム	老人保健施設	病院入院
件数	0	0	0	0	0	0	0
割合	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%

	グループホーム	その他	外来通院	入所サービス 複数利用	在宅系サービス 複数利用	入所・在宅サー ビス複数利用	不明	合計
件数	0	0	0	0	0	0	2	2
割合	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%	100.00%

図④-3-6 利用サービス



#### ④-3-7 職員種別の傾向

職員種別については「介護職員」、「介護・看護職」がともに2件で、それぞれ40.0%となっている。次いで「看護師」が1件、20.0%となっており、その他の職員種別はなかった。

表④-3-7 職員種別

	介護職員	ケアマネ	看護師	医師	相談員	ホームヘルパー	その他
件数	2	0	1	0	0	0	0
割合	40.00%	0.00%	20.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
	看護・介護職	複数職種	合計				
	2	0	5				
	40.00%	0.00%	100.00%				

図④-3-7 職員種別

